

目次

今秋から来年にかけての活動計画	編集部	1
東西学生就活サミットに向けて、いま準備していること	法政大学3年生	2~3
2013年度大学生アンケートの分析	筒井美紀	3~5
「労働相談Q&A」と「働く前に知っておきたい基礎知識」改訂版の発行に向けて	臼田一彦	6
誌上インインタビュー 八幡まるごと館長に聞く	上谷順子	7~10
『あったか歳時記』 <秋の色は……>	上野 都	11
編集後記、図書紹介		12

NPO法人あったかサポート 今秋から来年にかけての活動計画

今年の私たちのNPO法人の活動は、今秋季に若者や社会人を対象にした労働関連法教育の集大成として12月13日(土曜日)に開催される「東西学生就活サミット」に向け、その大詰めを迎えています。就活中の親子と一緒に受講され、既存の就活とは異なる視点から新たな学びを発見して頂きたいと思っております。

さらに来年2月1日(日曜日)には、2015年「新春交流会」を開催し、年金の一元化問題など公的年金制度のあり方について講演会を開催する予定です。年金制度は、年金の受給世代と年金保険料を負担し支える現役世代の問題です。「日本の年金はどのようなのか」公的年金制度の現状と課題について、議論を深めます。

そして来年5月23日(土曜日)には、私たちNPO法人の第10回総会を開催します。記念シンポジウムとして「労働と社会保障の専門家集団」にふさわしい今日的な労働と雇用の課題を教育や福祉の視点から論じる(こと)によって、就労困難者の社会参加の可能性について語り合(こと)していきます。

シンポジウム「東西就活サミット」立場を超えて語り合う就活生4人に8つの質問

報告者 筒井美紀(法政大学)、川口 章(同志社大学)
 登壇者 法政大学の3・4年生、同志社大学の3・4年生
 12月13日(土) 午後1時30分~5時15分(受付午後1時より)

懇親会 午後6時~8時

会場 同志社大学 今出川キャンパス 良心館RY301

2015年新春交流会

講演会 「持続可能な社会保障の課題—公的年金制度のあり方を問う—」

講演者 小塩隆士(一橋大学)

2015年2月1日(日) 午後3時~5時(受付午後2時30分より)

懇親会 午後5時~7時

会場 ホテル・セントノーム(京都駅八条口東入る南側)

結成10周年記念シンポジウム「労働と福祉の一体化に向けた課題を探る」

パネラー 濱口桂一郎(労働政策研究・研修機構統括研究員)

本田 由紀(東京大学)

埋橋 孝文(同志社大学)

2015年5月23日(土) 午後2時30分~6時(受付午後2時より)

懇親会 午後6時~8時

会場 ホテル・セントノーム(京都駅八条口東入る南側)

価値観の違いを突き抜きたい

—サミットに向けた筒井ゼミでの準備—

法政大学キャリアデザイン学部 3年 坂口 美夏子

12月に行われる「東西学生就活サミット」。この大規模なネーミングに見合うよう、私たち筒井ゼミでは、日々の議論により一層の熱が入っています。

当日に向けて私たちは、就活に抱くイメージ、就活へのこだわり、就活の際のツール、大学のブランド名など、就活における様々な議題をそれぞれが持ち寄り、意見を交換し合います。ゼミのメンバーは4年生1名、来年就活を控える3年生5名、そして新たに5人の2年生を加えた計11人で活動を行っています。

普段の筒井ゼミでは、教育、労働、地域、人間関係など、ゼミ生が関心を持つそれぞれの分野にまたがって、毎時間それぞれの研究の発表とディスカッションを行っています。

もともとの興味分野が異なる分、今回の就活サミットに向けても、ひとつ

の議題に対して様々な切り口で議論が展開していくので、ひとりでは見落としがちなさまざまなツッコミどころを多く見出すことができました。

議論中、誰かの意見にゼミ生みんなが共感することもあれば、なかなかその価値観に賛同してもらえないこともあります。ただ私たちは、どんな価値観が正しくて、どんな価値観が正しくないのかということをゴールにしていくのではなく、なぜ、そのような価値観が生まれたのか、誰がどのようにして、そのような価値観に影響する環境を作り上げてしまったのか、というところまで追究しています。

なぜ、そのような価値観が生まれたのか……。これを突き詰めるためには、ゼミ生一人一人がまずはその価値観に対するそれまでの経緯と経験をすべてオープンにさらけ出す必要があります。今は同じ法政大学に通い就活の際

には、同じ大学の出身として同じ土俵からスタートする私たちでも、それまでの経験が違えば就活に対する期待と不安も全く異なります。

その「違い」をそれぞれ突き詰めたとき、思いもよらない共通点、そして解決策が浮き上がってくるものだと思います。ゼミ生のあいだでも様々な違いや共通点がある中で、東と西、環境が全く異なる空間で過ごす学生同士の、相違点、そしてそれを突き止めた先の共通点が何なのか、12月にその答えが見つかることを私たちは今からとても楽しみにしています。

そのために、今回ゼミ生代表として選ばれた私が「東西学生就活サミット」が開催されるまでにやるべきことは、「私」の就活に対する価値観や期待は何なのかということを含め以上に真剣に考え、ゼミ生とのディスカッションの中でより明確にしていくことだと

思っています。

正直、このサミットのお話を頂いた今春の時点では、私は就活に対してとても楽観的な考えしか持っておらず、どこか他人事のように就活を考えていました。しかし、就活一斉スタートの時期が日に日に近づいてくるにつれて、私にも就活に対する焦りと不安の感情がどことなく、様々な場面で現れるようになってきました。では、何ができるように不安なのか。ただただ周りの雰囲気流されているだけなのかもしれない。焦る必要はないのでしょうか。冷静に考えればわかるのに、いつも見えない敵と戦っている気がしてなりません。

今回のサミットは私にとっても今までの自分、未来の自分、そしてこれからどのような状況のなかで将来を切り開いていくのかを見直す大きなチャンスとなりました。

サミットでは、正直な自分の気持ち、意見をしっかりと述べたいと思っています。会場にお越しいただいた皆様には、私の意見を学生一般の代表的な意見としてではなく、私の今までの経験や学び、環境を踏まえたうえで、他の登壇する学生、息子さんやお嬢さん、身近にいる学生、そして御自身とたくさん比べながら、一緒になって今の就



活の現状、そしてこれからの就活の在り方をあらゆる角度から考えて頂けたらと思います。

就活生が、本当は何と戦わなければならぬのか。企業でも、友人でも、ライバルでも何でもなく自分自身と向き合うこと、そして、耳を傾けるべき相手に耳を向ける勇気と判断力をどう身につけていくか、その答えのヒントが会場で見つけられればと思います。

若者がピースフルに働き生きていくために —大学生の人間関係と就職活動から考える—

筒井 美紀 (法政大学キャリアデザイン学部・准教授)



1 若者がピースフルに働き生きていくために

早いもので、このシンポジウムも第7弾を迎えることとなりました。「若者が雇用につまずかないために」には、

どんなことが必要でしょうか。おそらく本誌の読者であれば、「文科省が推進しているような就職活動に直結した『キャリア教育』(だけ)ではなく、労働(法)教育だ」と真つ先に指摘さ

れるでしょう。私もそれに賛同します(なお、本シンポジウム・本報告では、若者は大学生に限定します)。

その上で付言したいのは、「若者が雇用につまずかない」の意味・範囲を拡張して捉えることも不可欠だ、ということ。 「雇用につまずかない」とは、ブラック企業にひっかからず、よりホワイトな企業を能動的に選んで就職すること、そのための学習をしっかりとすることのみを意味するのではありません。 職に就くことは或る時点で完了する動作ですが、仕事は継続する動作であり、それによって喰っていかねばならないからです。

大学生たちは、「何とか(あるいは首尾良く)就職できたとしても(できたけど)、将来の長きにわたって仕事をし生活し続けていけるだろうか」という不安を持っています。14校の914人を対象とした2013年度のアンケート調査では、「中高年や老後

の生活について不安を感じる」に「よく/まあ当てはまる」と回答した者は、男子で66・3%、女子で76・2%にも達しているのです。

社会構造の現実を鑑みれば、この不安は決して無くならないでしょう。それゆえ学生たちは、就労・生活不安を無くそうとするのではなく、この不安を和らげ、それと共存するすべを学ぶ必要があります。これがタイトルに掲げた「ピースフル (Peaceful) に働き生きていく」ということであり、「雇用につまずかない」の意味・範囲が拡張されたものであります。そして私たち支援する側は、彼らがこのすべを学ぶ機会を提供する力量を、もつとつべきだと思っております。

2 就労・生活不安を増大させる要因

では、就労・生活不安を和らげたり、逆に増大せたりするものとは何でしょうか。先述のデータでいうと、

「中高年や老後の生活について不安を感じる」原因は、学年進行でも、大学ランクでも、家計状況でもありません。就職活動が近づけば近づくほど、有名大学でなければいけないほど、家計状況が苦しければ苦しいほど、不安が大きくなるのではないかと予想されるでしょう。しかし、そうではありませんでした。データをさらに分析してみると、就労・生活不安を増大させる一因は、自分を出せる人間関係の欠如だということが出てきたのです（後述）。しかも、そこには男女の違いが見られます（この詳細は当日提示）。

以上をふまえると、次のようにいえます。すなわち、若者（大学生）がピースフルに働き生きていくためには、彼らが、労働関連（法）の学習をしつかり行なうと同時に、就職活動に臨む以前の段階で、自分を出せる人間関係を築くことが肝心だ、ということ。今日の報告は、この2点について順番にお話し致します。

本誌の読者のなかには、「自分は労働（法）教育には関与しているが、大学生の人間関係構築については自分の守備範囲外だ」という方が多いかもしれません。しかし、学生一人一人の内面においては、両者は切り離せない問題に他なりません。だからこそ本シ

ンポジウムは、後者に関しても、さまざまな立場・さまざまな仕事に携わる方々と——保護者、企業の求人担当者、ハローワークなどの行政機関、大学のキャリアセンターの職員、そして学生たちと——あれこれと考えをめぐらし意見を共有する場としているのであり

ます。

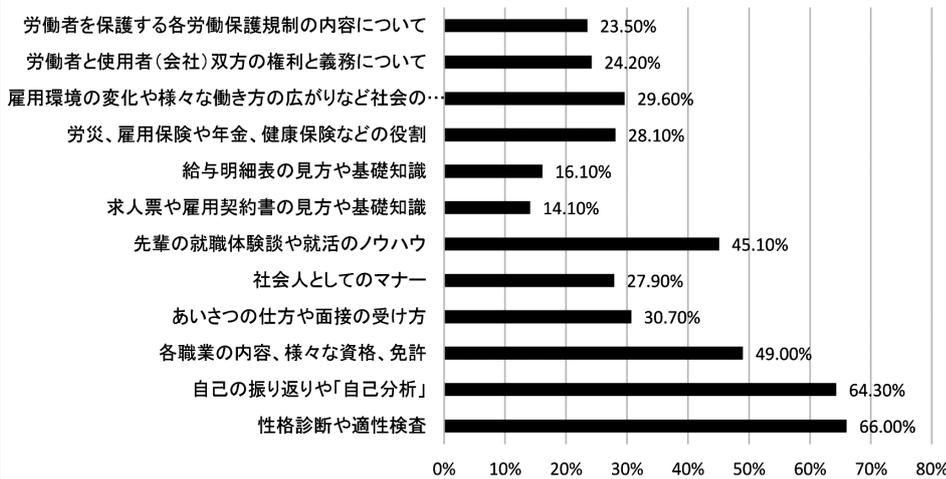
3 労働教育的学習はどれくらい実施されているか

話を戻しましょう。労働関連（法）の学習（以下、「労働教育的学習」とします）は、大学でどれくらい実施されているのでしょうか。2013年度

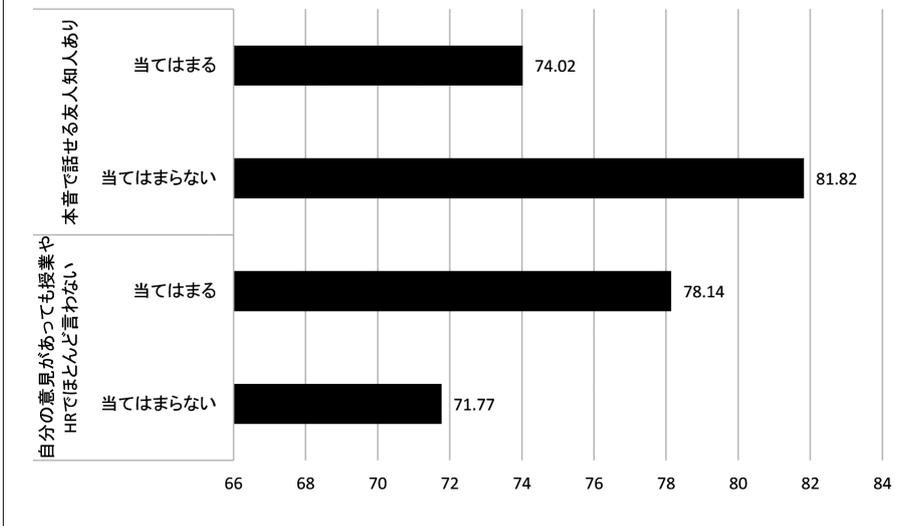
アンケートで、大学3・4年生に絞って見てみた結果が、上のグラフです。ここからは、「労働教育的学習」に比べて「就活直結的学習」の方がより多く実施されている傾向が読み取れます。

このグラフをさらに大学ランクで分

受けた(受けている)講義やセミナー(3・4年生)



「中高年・老後の生活が不安だ」に「当てはまる」の割合(%)



けてみると（詳細は当日提示）、下位校ほど、適性検査や自己分析、職業・資格といった就活直結的学習の割合が高く、上位校は、労働法や雇用制度・慣行といった労働教育的学習をしている割合が高いことがわかります。なお、厳密ではありませんが、数年前のアンケートと比較すると、「給与明細書の見方」などの割合は下位校で増加しているようです。これは、ブラック企業に関する社会的認知の高まりを反映しているのでしょうか。とはいえ依然として、「労働教育的学習」に全学的に取り組んでいる大学はまだごく少数です。「労働教育的学習」を拡大する必要があるようです。

4 自分を出せる人間関係

第2節で少し述べましたように、「中高年や老後の生活について不安を感じる」かどうかは、自分を出せる人間関係の有無が左右しています。もう少し具体的に示すと、4ページの下の方のようになります。「本音で話せる友人・知人がいない」人の方がいる人よりも、「自分の意見があっても授業やホームルームで言わない」人の方が言う人よりも、「中高年や老後の生活について不安を感じる」割合が高くなっています。つまり、親密な人間関係

があること、そしてまた、授業やホームルームといった「継続性の有るおおよけの場」で自分を出せる関係があることが、将来の就労・生活不安を和らげています（もちろんそうだととしても、依然としてその不安の割合は7割超と高いことに変わりありませんが）。

5 おわりに

法政大学から当日登壇する4年生が指摘しているように、就職活動は、基本的に「独りで闘わざるを得ない」競争的な活動です。それをとおしては、「強靱な弱さ」を養うことはできないでしょう。ここで「強靱な弱さ」とは、お互いの至らなさや力不足を認めつつ、相手に与える痛みを感じながらも厳しく指摘し合うような関係を続けていくことで育めるものです。それは相互の弱点や不足を補い合い高め合うことで何とかやっていけるのだ、という自己確信です。これが得られて初めて、ピースフルに働き続け生き続けていけるでしょう。親密な関係と、継続性の有るおおよけの場で自分を出せる関係とに共通してあるのは、この「強靱な弱さ」ではないでしょうか。

頑張ってエンプロイヤービリティを高めて内定を獲得したとしても、それだけでは、「自分は何とか働き生活して

いける」との自己確信は得られないでしょう。得られたとしても、就職後ゆらぐことが多々あるでしょう。だから私は、学生たちに、部活やサークルやゼミへの真剣な参加によって「強靱な弱さ」をともに培い、それによって支え合っていくことの充実感と大切さを大学時代に深く味わってほしいなあと思います。それと同時に、私たち支援する側は、それを傍でそっと支えてあげたいなあと思うのです。

当日登壇する学生たち4人は、就職活動に関する8つの質問に答えるかたちでプレゼンテーションをしますが、必ずやそこには、彼ら自身の部活やサークルやゼミといった活動をとおして得てきたもの、また同時に、労働教育的学習の程度が及ぼしている影響が、滲み出てくることでしょう。私の報告を叩き台に、また関連づけながら、彼らのプレゼンテーションをお聴きに、彼らとの自由闊達な対話を楽しんでいただければと思います。

当日の「4人の学生に8つの質問」は下記のとおりです。

4人の学生に8つの質問（要旨）

<就職活動のイメージ>

Q1. あなたのアルバイトの経験やインターンシップの経験は、就職先を選ぶ際や、就労についての考え方に影響を与えます（ました）か？

<価値観>

Q2. あなたが就職先（仕事）を選ぶ際に何を判断基準にしましたが、会社のネームバリューなどこれだけは外せないという基準はありますか（ありましたか）？

Q3. 就活の行う際には、就職先を数で狙いますが、質で勝負しますが、何社ぐらいエントリーしますか（しましたか）？また4年生は想定数と結果数に相違はありましたか？

<ツール>

Q4. あなたは就活支援先として学校のキャリアセンターや、リクナビなどのネットをどのように活用したいですか、（活用しましたか）？また、就活支援先（リクナビやキャリアセンター等）に何を求めますか。

Q5. 就職に向けて、企業研究以外にどのようなツールを参考にしますか（しましたか）？それが役に立った（役に立った）と思いますか？役に立ったとするならばどのような意味においてですか。あなたが就活のときに特に使用した情報源はなんですか？

<就職活動>

Q6. 4回生を対象にした質問になりますが、会社との面接の中で、あなたが答えにくかった質問、理不尽と感じた質問を受けましたか？その程度の質問ならば仕方がないと思う質問はありましたか？

また3回生は、インターンシップで同様の質問された経験がありましたか？

Q7. NPO法人あったかサポートが進めてきた労働関連法教育に関する普及活動では、自らを「企業に選んでもらう」のではなく、雇用環境や求人票の読み解きなどを学ぶことを通して、「自分から企業を選んでやれ」というメッセージを発出しています。実際のところ、そのような姿勢で就職活動はできましたか（できましたか）？

<地域差>

Q8. 関西の就活生と関東の就活生は、それぞれに相手に対してどのように感じますか（感じましたか？）或いはどのように捉えましたか？



『労働相談Q&A』の発行と

『働く前に知っておきたい基礎知識（教科書版）』

の改訂版の発行に向けて

当会出版局編集委員 白田 一彦（社会保険労務士）



『夏から開始された編集作業』

現在、『労働相談Q&A』と『働く前に知っておきたい基礎知識（教科書版）』の改訂版の発行に向けて、澤井理事長をはじめとして10名ほどのメンバーで編集作業を進めています。

『労働相談Q&A』は、平成21年1月に初版を発行した『働くために知っておきたい基礎知識（Q&A版）』の内容をベースにしながらも、今年1月

から実施している「夜間相談ホットライン」での相談内容等を加味して大幅に書き換え、学生、労働者、経営者の方、そして労働相談に従事する人にも役立つ内容となるように工夫しています。

『労働関係法令は原則と例外を前提』

旧版は、教科書版の副読本の意味合いもあり、労働教育に主眼を置いて編集していましたが、今回は、労働相談に対応したQ&Aとして編集し直しています。その内容は、労働者からの質問に対して労働相談員が答えることを前提にしており、相談者に対し「自分を責めなくても大丈夫」という安心のメッセージを伝えられるような「回答」となるように心がけています。一方で、労働関係法令は、原則と例外を前提に組み立てられています。「解説」では、労働者の権利を伝えながらも、労働者に注意喚起することも忘れないように

しています。

『労働相談Q&A』として発行を予定している新版は、京都府の「企業公募型起業育成・支援事業」を活用して実施している、ブラック企業・セクハラ・パワハラ「夜間相談ホットライン」事業の一環として企画したものであり、事業実施期間中（本年12月28日まで）に発行します。

『働く前に知っておきたい基礎知識（教科書版）』は、平成22年12月に初版を発行しています。すでに4年が過ぎっており、その間にいくつもの法令の改正が行われ、また、働く環境も大きく変化しています。同書もこのような改正や変化に対応することが急務となりました。

『ジェンダーなど三つの視点から編集の仕直し』

改訂版の編集にあたっては、まず、

法令の改正などとともに、各データの数字を最新のものに修正します。また、コラムなどは時代の変化に適合した内容に書き換えます。特に、①働くということにジェンダー視点から迫る、②そもそも働くとは何かを問う、③限定正社員（ジョブ型正社員）の動きを追う、④フリーランスな働き方に着目する、このような視点から現在の労働関係の課題を指摘したいと思っています。

『編集作業は悩みに醍醐味』

具体的な編集作業においては、旧版のどこをどのように修正するのか、それはなぜ必要なのか、どのような修正が求められているのか、ということについて、メンバー間で議論を続けていくところです。時代の変化に対応してどのような内容にしていくべきなのか。編集作業に携わる者の悩みであり、醍醐味でもあります。今回は、旧版の改訂という作業ですが、改めて旧版（初版）の編集作業に関わられた方々のご苦労に頭が下がる思いです。

新版（改訂版）は、来年の「新春交流会」でお披露目したいと思っております。



地域の人たちの出会いをつくる

「八幡まるごと館」館長 上谷順子さんに聞く

今回は、2002年12月13日に享年84歳で亡くなった上谷耕造さんの後を継いで京都府八幡市男山にある「市民協働のまち」つくりに取り組んでいる妻の上谷順子さんに登場して頂きました。「八幡まるごと館」を拠点にした市民活動の内容や思いについて、今は亡き上谷耕造さんに代わって語って頂くことにしました。



編集部

上谷耕造さんが亡くなって早いもので今年12月には3回目の法要が迎えます。この間に彼の意思を継いで「八幡まるごと館」を支えています。苦労はありませんか。

順子さん

まず、最初に断っておきます。私が「市民協働のまち」づくりに取り組ん

でいる」というのは？です。

2009年の2月から3月頃私が退職すること決めた時、夫から「次はまるごと館の館長やで」と言われました。いつも、急に、上から、相談もなしにこうです。オープン6月からは余りひとが来ないまるごと館で何かをして過ごしていましたね。

今では、私は毎日色々な方々と話し、交流が出来るので、嫌じゃないし、まるごと館での生活を結構好きかもしれない。楽しいですから。特に、夫の上谷耕造がなくなってからの2年近くをこのまるごと館が支えてくれた、そういう気がしています。

苦労というのではないかもしれませんが、どうやって「まるごと館」の存在を知ってもらうかはいつも考えますね。

編集部

これまで住んでいたお家を去って、今の居住地に「八幡まるごと館」ができました。もう何年前になりますか。面白いネーミングですね。彼は、私たちNPOあったかサポートの名前の名付け親でもあります。ネーミングがとても上手い。「八幡まるごと館」には、どのような意味合いが込められていますか。その由来を聞かせて下さい。

順子さん

上谷耕造は八幡まるごと館のホームページに「八幡市は、このまちならでは、歴史・自然・産業・伝統文化・人材など豊富な「地域のお宝」に恵まれています。八幡まるごとミュージアム

ム運動は大規模な施設や大掛かりな事業に頼らずに、地元の魅力ある資源の発掘や再発見によって、「地域のお宝」を活用し、私たちのまちに誇りを持ちこれらを保存・伝承、発展させ、地域やまちをまるごと、青空ミュージアムにしていく運動です。八幡まるごと館は、この運動の中心として出会い、交流、相談などの場として、また、学び、発見、体験、創造、展示、発表の場として、誰でもお使いいただくことができます。』と書いています。

2009年大通りに面した店舗つきの住宅を購入して、店舗部分を「街行く人のだれもが自由に立ち寄れる、地



域サロン「八幡まるごと館」に、厨房を『上谷耕造事務所』にリフォームしました。まるごと館のオープンはその年の6月6日でしたから、もう5年以上も前のことです。

八幡まるごと館の名前は八幡まるごとミュージアムから由来します。

編集部

上谷耕造さんは、「八幡まるごと館」から「市民が元気なまちに！」という冊子を発行していましたが、何号まで発行しましたか。どのような思いで発行していたのでしょうか。今はその意思を継いで発行は継続されていますか。

順子さん

本人が元気な頃には、まるごと館とは別に上谷耕造のホームページがあったので、そこで「市民が元気なまちに！」を紹介していました。ところが、亡くなる2012年12月13日前後にオンラインの期限が切れてしまっていて、あとで気がつき連絡をとったのですが、ホームページは復活できませんでした。消えたホームページを、前に住んでいた近所の方がパソコンから復元して下さって、まるごと館のホームページの中に入れてよと話し合い（その

ほうが多くの方々に見て頂ける）、現在の形になったのです。このご厚意に深く感謝しています。

だから、「市民が元気なまちに！」は「八幡まるごと館」から発行したわけではないのです。上谷耕造にとっては、「八幡まるごと館」は取り組む中のひとつのことと私は把握しています。いろいろなことをする足掛かりではあったようですが。

冊子「市民が元気なまちに！」VOL.3からは、2012年8月末頃自分の病気を見越してパソコンに向かって作ろうとしていました。以前のよう外に出て人に会えないし、自分の考えも伝えることが出来ないから今までのまとめのような形で思っていました。読んでいて、もつと気楽に考えていたらと思つた程です。次のVOL.4については完成まであと少しのところまで身体がしんどくなってきました。2012年10月下旬のことです。この冊子は12月に夫が亡くなってから発行しました。それ以降「市民が元気なま

ちに！」は発行していませんが、第1期市議時代（1991〜2003）のまとめ「ほっとするまちへ」は昨年1周年を前に私が作りました。

編集部

その冊子には、「新しいふるさとづくり・八幡まるごとミュージアムのまじづくり」構想が描かれていますが、どのような彼の思いが込められているのですか。

順子さん

上谷耕造はその冊子に『地域の人たちの出会いやつながり、絆が次第に薄れ「無縁社会」化していくなかで、少しでも心の安らぎを取り戻せる「場づくり」ができないかと考え、ささやかながら「八幡まるごと館」を開きました。それは単なる思いつきではなく、私が永年思い描いてきたことです。』『今実施している「八幡まるごと館」の活動は①地域住人の談話室（おしゃべりサロン）、たまり場②朝採れ地元野菜の直売③趣味、園芸、パソコン教室…。こうした活動は、いわゆる「新しい公共」という考えに基づいて、民間の力で公的部門の活動分野を担おうとする意欲的試みのひとつだ。「八幡まるごと館」のような「地域サロン」

は全国的な広がりを見せている。…」と書いています。こんな時代だからこそ、ひとが集え、共に笑ったり、楽しんだり、時には共に悲しんだりすることが必要とされるのかもしれない。人とのつながりは生きていく意欲を持たせてくれるし、学ぶ力の誘因になるし、新たなことに挑戦しようという気持ちをも呼び起こしてくれると、この5年間のまるごと館の活動から確信しています。よく「市の施設ですか」と言って入ってこられる人がいます。行政とか何かの組織に頼らずに本当に手作り、何の制約もなく企画から案内・実行までするわけですから、自分たちでとてもやりがいがあることに取り組んでいると思います。

編集部

なるほど。お隣や近所の人たちの出会いやつながりを大切にしたいということですね。まちづくりは、行政の力にのみ頼るのではなく、そこに住む市民が自分たちの手でということですね。

順子さん

私はまちづくりという言葉を意識して動いたことはないですが、今やっていることが、そういうことに結びつ

いていたら嬉しいですね。自治会の活動とまるごと館のそれと公民館等との違いについては、ひとつは資金的な面で、ふたつには広報的な面で普段からよく思います。壁を乗り越えて、それらが有機的につながっていきけるようになったら、面白いことが出来そうですね。それが市民協働ということなのでしょう。

編集部

具体的には、どのような活動をされていますか。具体的な内容をお聞かせ下さい。

順子さん

まるごと館の1日は野菜生産者の方々に野菜を運んで来てもらうところから始まります。生産者は10人で、多い時は棚に野菜がのりきらないくらいです。その後30分前後は野菜のことや害虫のことなどよく交流されています。朝の楽しい時間です。

大きな行事としては年2回（5月と10月）のまるごと市があります。それは「八幡まるごと館」を知ってもらって参加していただく、まるごと館の設備を一つずつ揃えるためにも考えて取り組んできました。フリーマーケットを募集し、テントを張り、という

気合を入れた結構大がかりなものです。実施できてきたのは開館当初からまるごと館をサポートして下さっている方々の存在があったからです。課題は広報活動です。公民館等2箇所「まるごと館たより」とチラシ、ポスターを依頼し、町内や近くの団地にはまるごと市のチラシを配布します。新聞に案内を載せてもらったことも何度かあります。かなり定着してきましたよ、多くの人で賑わいます。今年の10月19日でもう11回目ですから。今年1月の新春餅つき会は若い人も参加もあり、楽しい時間が持てました。12月はクリスマスコンサート。昨年は「上谷耕造を偲んで」開催したので、知り合いの方がたくさん来て下さいました。また、参加者が歌えるコンサートを考えていこうと思っています。

講習会では2月味噌作り、6月ぬか床は「使い捨て時代を考える会」から講師に来ていただいています。11月には沢庵講習会も予定しています。定期的には毎週パソコン教室、月1回絵手紙講習会、随時には布ぞうり、エコクラフトでカバンをつくる、クリスマスリース、干支の切り絵、しめ飾り、マツトをつくる等々行っています。どの講座も笑い声が聞こえ、元気になって帰っていかれます。現在、定期的に貸

し館もしています。

特筆すべきはまるごと館での醍醐味は日常のひとつとひとつのつながりだと思っています。知らない人どうして話が始められます。何故なのかわかりませんが、以前から知っていたように。それは不思議と楽しい時間です。そうして、ひとひとのつながりが生まれて来ます。

まるごと館を運営するのに多くの方にサポートをしていただいています。まず、野菜販売では集客力の多さが、色々な面で大きな力になっています。生産者の方々はまるごと館のことを理解して下さって、それまでのんびり畑に取り組んでおられたけれど、最近では毎日のように野菜を届けて下さいます。また、講師の方々にもお世話になっています。ご近所の方もとても協力的で心強いです。「まるごと館で使って」と4月にさをり織機を下さったのもご近所の方です。現在織機の使用は2ヶ月位順番待ちです。それを目当てに初めて来られる方もおられます。夫がいたらきつと「よかったなあ」と喜ぶと思いますね。ひとが集まる場になって来ました。

編集部

彼が亡くなって止まってしまった活動とそれとは別に活発になった活動内

容というモノがありますか。

順子さん

止まってしまった活動というのはあまりないと思いますが、「上谷を支える会」の会議が毎月取り組まれていたのがなくなりました。だから、支持者の方の参加が少なくなったというのがあります。まるごと館を開いた時に夫と話したのは支持者だけではなく、幅広い人が参加できる場にするということでしたが、実際には、「ここは上谷の事務所だ」という目で見ている人がいたようです。上谷事務所とまるごと館は区別していて、入り口も別にしていたのですが。「上谷を支える会」の会議でまるごと館を使用する時は貸館料をいただいています。

夫が亡くなってから、市議会議員がやっているという縛りがなくなったのが少しは関係しているか、来られるひとが増えました。それはまるごと館をずっと続けているからでもあるでしょうが、オープン以来、来館者ノートをずっと書いていますが、それを見ると一目瞭然です。

編集部

最後に順子さん自身は、これから何を目指し「八幡まるごと館」を使って、



どのような活動を進めたいと思っ
ていますか。

順子さん

夫は後一期議員をやったら、辞めて、

もっと足元を見て八幡を共に元気にしていける若い方を育てていきたいとよく言っていました。地域を育てる発想で「八幡まるごとミュージアム運動」を共に進める。

私はまるごと館を5年間やってきて、この頃自然に、自分で何か持って動きたいと思うようになりました。地域を育て、地域をデザインするということが。実をいうと夫の本箱にこういう本がありました。このような機会をいただいた、私なりにこの5年間を振り返ることが出来ました。ありがとうございました。

編集部

長い間、お話を聞かせて頂きありがとうございました。久しぶりに故人となった上谷耕造さんを偲ぶことができました。今後も彼の意思を継いで、八幡・男山の皆さんのまちづくりが発展される事を期待したいと思います。



セミナー

「4月からの生活困窮者自立支援法の施行に備える」

と き：11月22日（土）13時～16時

ところ：同志社大学今出川キャンパス弘風館4階 K46

主 催：同志社大学社会福祉教育・研究支援センター

共 催：特定非営利活動法人あったかサポート

講師1 福原宏幸（大阪市立大学教授）

「生活困窮者自立支援法の意義と自治体の課題－どう活用するか」

講師2 垣田裕介（大分大学准教授）

「全国の自治体の生活困窮者支援体制－準備は整ったか」

講師3 高橋尚子（京都自立就労支援センター主任支援員）

「京都における就労自立支援活動－4月以降に向けて」

< 無料・事前申し込み不要 >

あったか歳時記

「秋の虫は…」

よ 野 郎

梅雨明けに猛暑日が数日かはあったが、今年の夏は雨の日ばかり、例年通りに蛇行しない偏西風、停滞する前線、そして相次ぐ台風…雨風は日本各地に茶色の濁流の爪痕を残しながら日々の暮らしを痛めつけ、無慈悲にも広島の広範な土砂災害をもたらして八月は終わった。

日本では旧暦の八月を葉月と呼んできたが、今では新暦の八月もそう言う。季語の世界では秋、木の葉が紅葉して落ちる月、「葉落ち月」から「葉月」と慣わすところ。

しかし、南方からの台風が続いて来る「南風月（はえつき）」から「はつき」と呼ぶ説もあるというから、まさに今年の「葉月」を言い得ている。もう早々とクマゼミもアブラゼミも鳴かない。時おりツクツクボウシが陽射しにつられ、か細い声を届けてくるばかりだ。

仰のけに落ちて鳴きけり秋のせみ

一茶 『八番日記』

「あきのせみ」は秋の季語だが、二つに読み解く。つまり、秋になって

から鳴く蟬―秋蟬（あきせみ）と、秋になっても鳴いている蟬の二通りだ。今、わたしの窓辺に届くのはどちらの蟬だろう。

長い地中の暮らしから這い出て、声の限りに暑い夏を鳴き尽くしたので、命をかけた鳴いているセミでもないようだ。

この一茶の句に共感こそすれ、どこか収めようのない夏の終わりに、彼らもわたしと同じように戸惑っているのではないか。土の色を映して羽を震わせる命こそ今年の秋なれば…

さて月は仲秋の月、今年の仲秋の満月は九月八日。九月九日の月はスーパームーンと呼ぶらしい。この日、月と地球が最も接近するのだとか、それゆえ今年の満月もかなり大きく見えるらしい。だが、近いといっても天体の基準、地上から仰ぐ人の目は当てにならないだろう。

おのが葉に月おぼろなり竹の春

蕪村 『遺草』

この句を枯れた諧謔と読むか、ある

いは素直に「竹の春」を楽しむとするか…

竹は、筍の出る時期には、栄養を奪われて衰える。しかし、秋になると勢いを取り戻し、葉も青々としてくる。この頃を「竹の春」というのだが、秋の季語になっている。

「葉落ち月」たるこの時節に、ひとり青々とおのが春を盛る竹の葉は、仲秋の月さえもおぼろに覆うほど一世の草花の常にさからう「春」を斜めに見て、月を仰ぐのか、あるいはおのが影を踏むのか…

蕪村の読みには到底及ばないだろうが、こうしてわたしが「竹の春」が含みおくものを仲秋の月に重ねるところは、月との近さを語るよりはるかに味わい深い。

次は「葉月」の散り敷く落ち葉のゆく末を語る蕪村の一句。

西吹けば東にたまる落葉かな

蕪村 『遺草』

落葉は冬の季語だが、何か読み取るべきものがあるのかと構えるほどに淡々とした一句。

この句に対する萩原朔太郎の評釈がある。

『西から風が吹けば東に落葉がた

まるのは當り前で、理窟で考へると馬鹿馬鹿しいやうな俳句であるが、その當り前のことに言外の意味が含まれ、如何にも力なく風に吹かれて、飽屑などのやうに轉つてる佻しい落葉を表象させる。庭の隅などで見た雪割たらう。』

昭和一一（一九三六）年 第一書房刊
「郷愁の詩人與謝蕪村」の「冬の部」より。

草木の四季の道理に逆らう「竹の春」と、風のままに吹かれる「落ち葉」とは、正反対に対峙するものを見せているようだ。

「西吹けば東にたまる」という自然の道理に逆らうところに、いわゆる「科学の進歩」というものを定め、それを一途に追い求めて日々の安楽に特化してきた暮らし。この八月、広島島の土砂の流れ落ちた住宅地の跡を視るまでもなく、道路の壊れた水道管から家屋への浸水が起こるといって皮肉な光景に驚き、背筋が凍ったのはわたしだけだったろうか。

特異だったといえはそうかもしれない。しかし、今年だけの事だったとも言えない。

今年のわたしの秋の色は、空蟬の羽、そして岸辺を抉って去った悲嘆の灰色…か。

会員年会費または寄付金のお願い

NPO法人あつたかサポートは、「労働と社会保障」に係る市民のコモンセンスづくりを進めます。当法人の活動へのご理解を賜り、本年度も引き続き年会費または寄付金をお願いします。

- (1) 正会員は、年間1口5,000円です。個人として総会での議決権を有します。
- (2) 協会員は、年間1口10,000円です。団体としての参加ですから総会での議決権はありません。
*個人、団体会員で2口以上の複数口数加入者には、特典として
今年度も、春秋セミナーの受講が無料になりますのでご利用下さい。
- (3) 賛助会員は、年間1口3,000円ですが、当法人の活動に直接参加できない方のための制度です。従って、総会での議決権はありません。

尚、協会員会費、賛助会費は寄付金控除にご利用できます。

郵便振替口座 00900-2-264244 振込先 → 特定非営利活動法人 あつたかサポート

編集後記

9月30日の新聞報道によると政府は、政・労・使の三者会議の中で「労働生産性の向上を図り、企業収益を拡大させ、賃金上昇や雇用の拡大につなげる」、「**年功序列型賃金を見直し、職務や成果に応じた賃金体系へ移行**」することを検討するとの考え方を表明した。要は、これまでの賃金体系や人事労務管理体制を見直し、職務や成果に応じた賃金の支払いへと移行させるといふものだ。ホワイトカラー・エグゼンプションの導入もそのような流れに沿ったものだが、**雇用の機会を拡大し、生活の安定をもたらす保障はない**。勿論のこと欧米並みの「同一労働・同一賃金」へと転換するとも、日本の雇用の特質の一つである「新規卒一括採用」について改めるとも言っていない。

そこで当会としては、本誌上で案内しているように来る12月13日に「東西学生就活サミット」を企画し、現実の若者の就労への意識と雇用情勢そして就活におけるジェンダーの壁について直視する事としている。その上で今の若者の多くが夢を膨らませ「こんな仕事がない」「あんな働き方がない」など「**なりたい自分**」と、**現実の自分とのギャップを受け入れられない**ことで社会の現状に適応できないことについても考えてみたい。

また当会としては、長年の労働相談の経験を活かして「**労働相談Q&A**」と労働関連法教育の経験に基づいて作成した「**働く前に知っておきたい基礎知識**」の改訂版の発行を準備している。詳細は、本誌の臼田レポートに譲りたい。

さて今回の誌上インタビューには、**当会の名付け親である上谷耕三さんが残された「八幡まるごと館」**の上谷順子館長に登場して頂いた。この館の取組は、地域社会の崩壊・無縁社会化していく中で**人と人のつながり、安らぎの場づくりを目的に開かれた**とのこと。その心意気を感じ取って頂きたい。

夏の終わりを前に**広島土砂災害**は、多数の命を奪った。犠牲者のご冥福を祈るように詩人の上野都の「あつたか歳時記(秋)」は、「**科学の進歩**」に懐疑的だ。秋にまつわるいくつかの句を紹介して頂いたが、その秋を求めて「**御嶽山**」の登頂に臨んだ人たちは悲しいことに**噴火と火砕流事故**に遭遇してしまっただ。それは科学の力がおよばなかったことをも示した。

競争社会をひたすら走り続けることを強いる働き方によって、果たしてこの国の未来が開けるのであろうか。**物質文明が天を打った感の強いこの国には、新たな労働とそれを支える社会保障の理念や体系が求められている**。そこで、当会としては、幾人かの研究者のお力添えを得て、来年早々に「**持続可能な社会保障・年金制度改革**」についての講演会と5月23日の第10回記念総会では、**労働・教育・福祉の視点から社会保障のあり方について縦横に論じる場**を持つことにした。是非、たくさんの方にご参集を頂きたい。

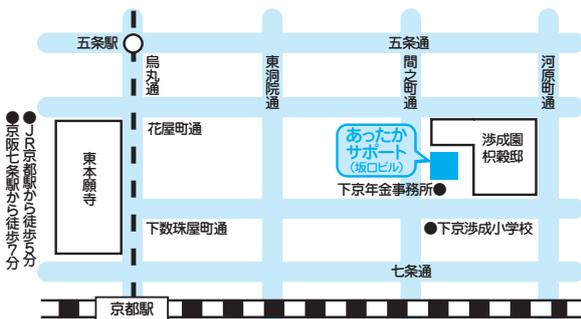
(笹尾)

■ご相談とお問合せ TEL 075-352-2640 FAX 075-352-2646

特定非営利活動法人 あつたかサポート事務局 笹尾達朗(当法人・常務理事)

HP <http://attaka-support.org/>
E-mail attaka-support@r6.dion.ne.jp

- お問い合わせ時間 平日/10:00~17:00(土・日・祝日は休業)
- ご相談 土・日・祝日に関わらず、別途設定します。



当法人に謹呈を
頂いた図書を
紹介しています

